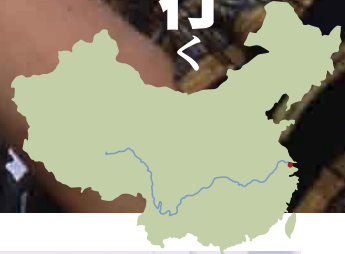


消えゆく長江の魚

急速な発展を続ける大都市・上海を流れる長江は、高層ビルの影を川面に映しながらゆったりと流れていく。この豊かな大河から魚たちの姿が消えようとしている。

18 上海

長江 を 行 く



5年後の万博を控え、建設ラッシュの浦東を黄浦江から望む

久しぶりの上海だから、宿は外灘近くの浦江飯店に決めていた。建造されたのが1864年というから、上海の歴史の生き証人みたいなホテルである。港のそばにあり、毎朝、グウォーオン、グウォーオンという低音のバスの音色のような、懐かしい船の汽笛で目覚めることになる。

ホテルの近くを流れるのは、長江の支流の黄浦江だ。支流といっても水量は豊かで堂々たる大河の風格を見せている。上海の町に高層ビルが林立するようになってからも、長江だけはいつも変わらない、と思う。

ところが、魚市場へ足を運んでみ

青息吐息の長江の魚たちに比べ、上海人は元氣である。年収10億円以上の金持ちが1万人以上もいるというから、この繁栄ぶりは尋常ではない。

黄浦江のほとりから、対岸の摩天楼のようなビル群を眺めていると、経済は発展しても、魚の住めない長江じゃ、問題だよなあ……という思いが込みあげてくる。

そんな感慨に浸る私のそばで、通訳の季丹は「上海人はそんな魚のことなんて考えちゃいないですよ」と私を嘲るようにカラカラと笑う。

「上海の女性を見たらわかるでしょ。彼女たちはロマンチックな恋愛は少なく、ソロバンをはじいてから結婚相手を選びます。文化的な北の人間と違って、上海人はおカネのことしか頭にありません」

ハルビン生まれで北京に住む季丹は、勝ち誇ったように言う。

彼女自身は貧乏な芸術家に惹かれるタイプで、恋に落ちるのも早ければ別れるのも早い。私は彼女の恋が壊れるときの修羅場を何回も目撃している。「あまり打算的なものなんだけど、もうちよつと相手を選んだら……」と心の中でひそかにつぶやいたものである。

たら、「悠久の自然」などという牧歌的な思いは粉々に打ち砕かれたのである。長江の魚がさっぱり見当たらないのだ。何百軒もある店のうち、長江の魚を扱っているのはごくわずかである。「長江ではもうほとんど魚がとれない。ここに並んでいるのはみんな養殖の魚ばかり。水揚げされた『本物』

の魚は値段も桁違いに高くて、そのまま高級料理店へ運ばれる」
この卸売り市場で20年も働いてきた李永晨さんは、そう嘆くのである。野生の魚は養殖ものに比べ、値段も10倍以上に跳ねあがり、庶民の食卓にはのぼらない。金持ちの美食家たちの胃袋に納まるというわけだ。

いまの長江は魚にとって大変厳しい環境にあるらしい。三峡ダムの建設で流れがせき止められ、遡行できなくなった魚は、上流の産卵場所を失ってしまい卵を産めない。また船舶の数も増え、水質の汚染も急激に進んでいるという。ダイナマイトや電気を使った荒っぽい漁も、中華イルカなどを殺してしまった。

長江にはかつて360種類もの魚がいたそうだが、稚魚の数は80%減だという。

「魚も弱くなったね。昔は捕まえた魚も生け簀の中で10日ぐらいはピンピンしていたけど、今じゃほんの1、2時間で死んでしまう」

そう言いながら、李さんはまたまた顔を曇らせるのである。長江はどうやら生き物の生息できない河になりつつあるらしい。

野中章弘
1953年兵庫県生まれ。アジアをフィールドに活字、写真、ビデオによるレポートを続ける。著書に「沈黙と微笑」「絆と絆」など。早稲田大学、東京大学講師。アジアプレス代表

▶築地と比べると上海の魚市場の商いは小さい。「上海の庶民はしまり屋だから高い魚は売れない」という
▼ミャンマー、タイなどから輸入される安い魚も増えている。長江や東シナ海の漁業は衰えているようだ

